

第4章 課題

姫路市では、豊富な森林資源の内、境界の分かっている一部の人工林及び里山林について、森林組合が森林整備を実施してきた。この構想では姫路市全体の森林を対象としていることから、「市民感覚による地域特性の発揮と交流」という基本方向及び「森の移り変わり」と水・林・木それぞれの循環との調和」という考え方を踏まえ、森林整備が行われていない原因は何かという大きな視点にたった課題を掲げ、その対策を検討及び講じることとする。

1 森林に対する関心と理解（もの）

昭和30年代まで森林は、薪炭の採取など生活と密着していた。しかし、エネルギーがガス、石油等に代替されてきたことで人々との関わりがなくなった。

加えて、木材価格の低迷、林業労働者の高齢化と減少から森林所有者の関心がなくなった。

森林については、遠望しても森林が荒れているか分からないこと、市民が森林内を見る機会がないことなどから、森林に対する正確な理解がされていない。

このため、森林に関する情報を季刊紙等の作成及び配布又は事業の説明会、林業技術の講習会を開催する必要がある。

2 森づくりの担い手の育成（人）

姫路市は、都市部があることで雇用の場が多く、林業のみで生活している人がいないことなどから、森林所有者のニーズが聞こえてこない。したがって、森づくりの担い手の育成の意識及び森林所有者への働きかけも薄れてくる。

森林整備の中核的担い手は森林組合であるが、競争相手がいないこと及び行政の代行機関・実行機関の役割を担っていることから、自ら森林林業に関する技術のレベルアップ、新たな事業への展開がしにくい。今後は経営感覚を持った森づくりの担い手の育成が求められる。

国においては、森林林業再生プランの検討委員会の中で、地域の全体像を描き実現させていくコーディネーターなどについて、既存の担い手をレベルアップさせることで育成することとなった。このコーディネーターが核となり、森林ボランティア、市民、企業及び行政、それぞれを連携・協働させ事業や施策を進めることが重要である。

3 森の移り変わり」と水・林・木それぞれの循環との調和（かかわり）

かつては、人と森林のかかわりは生活と密着していたので、森林と人との共生ができていたと考えられる。現在は、人工林について切捨間伐のみ実施している状況である。今後は、健全な森林の育成するための森林整備及び管理を通じて、森の移り変わり」と水・林・木それぞれの循環との調和をさせる必要がある。

人工林については、森林の団地化、林道・作業道等路網整備、機械化及び森林所有者の確定等基盤整備並びに林業技術の伝承などを、天然林については、管理歩道・作業道の整備、森林所有者の確定及び管理手法の研究などを実施していく必要がある。

